



Title	震災後の商店街の活性化と社会的役割：野田村におけるフィールドワークを通じた考察
Author(s)	内山, 志保; 徐, 朶朶; 劉, 笑疑
Citation	未来共創. 2025, 12, p. 215-231
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/102526">https://hdl.handle.net/11094/102526</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 震災後の商店街の活性化と社会的役割—野田村におけるフィールドワークを通じた考察

**内山 志保**

大阪大学大学院人間科学研究科

**徐 朵朵**

大阪大学大学院人間科学研究科

**劉 笑疑**

大阪大学大学院人間科学研究科

## 1. はじめに

東日本大震災から13年目を迎えた野田村は、新しい道路や公園、堤防が整備され、初めて村を訪れた学生たちには、そこが津波による壊滅的な被害を受けたことが一見して分からないほどである。野田村防災マップをもとに、現在の野田村の主要な施設の配置を示したものが図1である。それは、震災から2年後の平成25年4月に策定された「野田村復興むらづくり計画—津波防災対策と魅力・活力創出に向けて—」による、安心安全なむらづくりが着実に実現していることを示している。道の駅も現在の場所からより安全な高台に移転することが予定されている。しかし、「復興むらづくり計画」は2編構成になっており、「津波防災対策編」はその半分である。もう半分は、新しい野田村を創造していくための「魅力・活力創出編」である。そこには、賑わいの生活拠点としての商

店街の再構築、役場から陸中野田駅を結ぶ通りをまちの中心軸とするなどの計画が示されていた。

私たちは震災から13年目を迎えた今、新しい野田村を創造していくための村の中心となる商店街の現状がどのようになっているのかに関心を持ち、「商店街の活性化」をテーマとしてフィールドワークを行うこととした。一般に、中心市街地商店街が衰退した背景には、モータリゼーションの進展と大規模小売店舗の郊外立地、その後のIT化による人々の消費行動の変化など、1980年代以降の時代の変化がある。野田村の商店街は、そのような大きな時代の変化を経験しながらも存続し、現在は人口減少という困難に直面している状況にある。そのような社会構造上の問題は、簡単に解決することは難しい。かといって、根本的課題を抱えたまま、単発のイベントを繰り返すだけでは目指すべき方向性が見えず、活動も長続きしないだろう。そこで私たちは、一時的な売り上げ向上を目指す戦術を考案するのではなく、野田村の現状に即して、野田村にとっての商店街の価値は何かという根本的な問いを考察することで、長期的な戦略や考え方の提案をすることを目指してフィールドワークに取り組むこととした。

## 2. 活動内容

### 2-1. 調査の概要

本研究は、東日本大震災13年後の地方における高齢化が進む小規模コミュニティである野田村の商店街の役割を理解することを目的とする。高齢化率が38%（野田村 2024: 8）を超える野田村では、その商店街は住民の日常生活に重要な役割を果たしていると考えられているが、その具体的な機能や社会的つながりの形成に果たす役割は明確ではない。本研究は、フィールドワークを通じて、商店街がどのように住民の日常生活に組み込まれ、社会的つながりを維持しているのかを明らかにするものである。これにより、高齢化コミュニティの商店街活性化を目指し、野田村の商店街でのフィールドワークを実施した。参与観察とインタビューを用い、住民や店主との日常的なやり取りを観察した。村の人口は3,915人（令和6年8月時点）、高齢化率は38.4%であり、主な経済活動は農業と漁業である。商店街には15店舗ほどがあり、地元住民の日常的な買い物や交流の場として機能している。

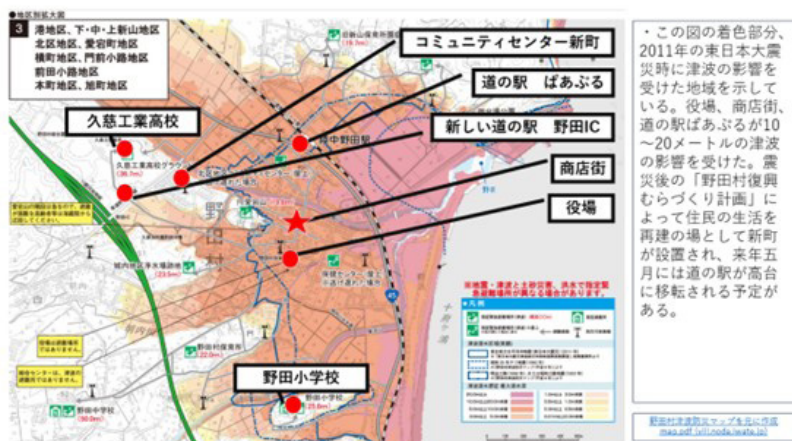


図 1 野田村防災マップ

## 2-2. 活動日程

この活動報告では、2024年8月19日から21日にかけて行われた3日間の活動内容について記述している。

初日、8月19日は徳屋の佐藤さんを訪ね、インタビューの進め方についてアドバイスをいただいた。それから、白木屋クリーニングや北末など、地域の個人商店でのインタビューを行った。その途中、久慈市から来た宇部さんと出会い、少し話をした。宇部さんに連れられて、田中時計眼鏡店に行き、商店街の皆さんが野田まつりを準備するために忙しいことがわかった。昼食をみなみで取った後、愛宕神社で歴史文化を振り返り、午後は小林フォトの小林さんへのインタビューを実施した。それから株式会社中健の社長のお爺さんにもたまたま出会い、雑談をしながら、野田村の昔の物語を教えてもらった。夕方には生涯学習センターでインタビュー内容のまとめを行った。

翌日、8月20日は、新しく建設中の道の駅や役場の訪問を通じて、野田村の道路の現状について理解を深めた。また、震災前は商店街にあったが震災後は道の駅の近くに移転した中野輪業の中野さんにインタビューをした。それ以外にも観光や買い出しを行い、午後には生涯学習センターで前日のインタビューを整理した。

表1 フィールドワークの日程

日程	時間	場所	活動
8月19日	9:00-9:30	徳屋呉服店	佐藤さんへのインタビュー
	9:35-10:05	白木屋クリーニング	谷地さんへのインタビュー
	10:10-10:50	(株)中健	商店街の散策する
	11:00-11:30	(有)北末(肉屋)	北田清子さんへのインタビュー
	11:35-12:30	洋食・旬彩料理みなみ	昼ご飯
	12:30-13:40	愛宕神社	歴史文化振り返り、観光する
	14:00-15:05	小林フォト	小林さんへのインタビュー
8月20日	16:30-夜	生涯学習センター・日形井	インタビューまとめ
	8:45-9:00	三陸新施設工事現場	新しい道の駅の現状を見る
	9:05-9:10	野田村役場	中野さんとのアポを取る
	9:15-10:00	道の駅	観光する
	10:00-10:30	徳屋呉服店	佐藤さんへのインタビュー
	10:35-11:20	生涯学習センター	インタビュー案の整理
	11:45-12:30	中野輪業	中野さんへインタビュー
	12:40-13:25	たいようのいちこ	昼ご飯
	13:30-14:45	野田村役場	中野さんへのインタビュー
	14:55-15:35	マミーストア	買い出し
8月21日	15:50-夜	生涯学習センター・日形井	インタビューまとめ
	9:10-9:55	(株)中健	横山さんへのインタビュー
	10:00-11:00	生涯学習センター	北田雅徳さんへ 電話インタビュー
	11:10-11:20	たいようのいちこ	松川さんとアポを取る
		生涯学習センター	インタビューまとめ
	12:00-13:30	たいようのいちこ	松川さんと昼ご飯を食べながら インタビュー
	14:00-15:20	野田村役場	野田村長の小田氏へのインタビュー
	15:30-16:30	商店街	商店街を散策し、写真を撮る
	16:30-夜	生涯学習センター・日形井	データ整理

最終日、8月21日は、午前中に中健の最近東京から来た従業員である横山さんへのインタビューを行った。また、出張中の北田雅徳さんへの電話インタビューも行った。昼ご飯はたいようのいちこで松川さんと一緒に食事をしながら会話をした。午後には野田村長の小田氏にインタビューを行い、活動の締めくくりとして、商店街を散策し、補足の写真撮影を行った。その後、データ整理を行った。

3日間を通して、商店街の人々の声を直接聞くことができ、多方面にわたる貴重な情報を得る機会となった。

### 3. 結果

#### 3-1. インタビュー内容

本節では、商店街の人々および野田村役場職員、野田村長へのインタビューの内容をまとめる。インタビューに際しては、商店街の活性化をテーマにフィールドワークに取り組んでいるという筆者らの目的を伝え、商店街の現状について、現在取り組んでいること、今後の希望など、大まかなインタビューガイドを準備した半構造化インタビューとして実施した。

##### クリーニング店 谷地広樹さん

クリーニング店の谷地さんは震災後、人口減少と大型店の進出により、個人商店が厳しい経営環境に置かれていることを話した。特に高齢者が多く、移動手段がない顧客層を取り込むのが難しい状況にある。谷地さんは「元々人口はやっぱり減っているから少ない人数をどう取り合うかっていう形になると小さいお店はどうしても状況が変わっていないっていう。小さい店はもう自分の特徴を生かした商売をしないと生き残っていけない。個人店はちょっとその競争力不足な感じですね。」と語られた。一方で、大型店は大量仕入れにより低価格を実現でき、個人店との価格競争力の差が大きいことが課題として挙げられた。

それに対して谷地さんは、配達サービスの導入や新しい機械の導入など、様々な対策を講じていることが分かった。谷地さんの配達範囲は1度の走行距離が100kmにも及び、遠方の顧客にもサービスを提供している。また、料金体系の明確化やコンピューター管理の導入により、サービスの利便性を高めている。高齢者層に加え、若年層の顧客も増えつつあるようである。

さらに、地域に若者を呼び戻すことについて、定住してもらうことが大きな課題として挙げられた。谷地さんは「例えば、今のお店はみんなほとんど親戚同士の方が多くて、みんなが自分の家で経営しているんでそれで多分、仕事のチャンスが少ないって感じ。自分の実家が商売されているんだったら、お仕事あるけど、結局、自営業以外の一般家庭の皆さんのところと子供さんが就職して、何年かするとやっぱりこっちに戻りたいなって思う気持ちがあるけど戻っても働く場所がないね。」と語られた。

谷地さんは、店に交流スペースを設置し、地元の若者や戻ってきた若者たち

が自由に集い、アイデアを出し合える場所にすることで、商店街活性化のきっかけ作りができると考えている。この場を通じて、地元での仕事や起業機会を模索する若者に、雇用やプロジェクトの場を提供できるだろう。高齢者が多い商店街の現状に鑑み、若者と高齢者の交流を促すプログラムやワークショップを開催することができる。これにより、高齢者が持つ地域の知識や経験を次世代に継承するだけでなく、地域の人々が協力して共に課題を解決する機会を提供できる。クリーニング店など、地域で奮闘している個人商店との連携を図り、交流スペースをビジネスの拠点として利用することも可能である。

### **(有)北末精肉店 北田清子さん**

肉屋を営む北田さんの説明によって、人口減少や高齢化、経済的な困難さなどから、商店街の活性化が難しい状況にあることが分かった。商店街への客足が遠のき、店舗の売り上げが落ち込んでいる状況が語られた。特に水産業や農業の不振が、商店街の活気を失わせる一因となっていることが指摘されていた。北田さんは、「お客様の要望に応じて肉の切り方を変えたり、手作業で丁寧に加工したりすることで、差別化を図っていますね。」と常連客への対応や個性的な商品の提供などで細々と店を維持していく考えを示した。一方で、事務作業の負担、補助金申請の手間など、様々な課題についても「私はパソコンもできないし困っている。何でもかんでもパソコンでやるから疲れるよ。なかなか現場の方の頭のいい人たちはこれ出しなさい、あれ出しなさいって簡単に喋るけど、それをやるのは大変だったよ。」と語られた。全体として、人口減少が深刻な影響を及ぼしている中で、個店の工夫と地域全体での取り組みが必要であることが示唆されていた。

### **小林フォト 小林孝志さん**

デジタルカメラの普及により、フィルムの需要が大幅に減少した。以前はフィルムを現像してプリントするのが主な業務だったが、現在ではスマホで撮影した写真をプリントするお客様が増えている。フィルム現像の設備は震災で被災し、修理や維持が困難になったため、完全にデジタル対応に切り替えざるを得なくなった。小林さんは「機材が浸水したり、現像液が使用できなくなるなど、深刻な被害があったよね。」と語った。震災前は地域に活気があり、イベントなども行われていたが、震災後は人口が減少し、活気が失われてしまった。地域



の人口減少に伴い、顧客数も減少している。さらに若い世代はスマホで写真を見るだけで十分で、プリントする需要が低くなっている。高齢者層は写真を大切にしてプリントを求める傾向があったが、その層も徐々に減少しつつある。

課題に直面し、小林さんは、「確かに今日お話伺ったお店の皆さん、こういうちょっと座れるスペースを作っていました。クリーニング屋さんもそうしているし、そういうお店がいっぱいあってお客さんが話してから帰る。」と語った。プリントサービスだけでなく、写真を通じた交流の場の提供など、新しいビジネスモデルを模索している。高齢者向けのサロンのような場所を設け、写真を通じて人々が集う機会を作ることで、コミュニティの拠点となることを目指している。また、地域のイベントに参加し、子供向けのフォトゲームなどを企画することで、写真に親しんでもらう機会を設けようと考えている。過去の写真を使ったクイズなどのアイデアも出された。このようなイベントを通じて、コミュニティとの関わりを深めることが期待されている。

## 中野輪業 中野辰弥さん

中野輪業は、昭和24年に先代が商店街の役場に近い場所で創業したが、津波で被害を受け、国道沿いの現在の場所に移転した。津波でお客さんから預かっていたバイクはみんな泥に埋まっていた。「元々もうそろそろやめようかなって思ってた。震災の後、商工会に辞めるって言ったんですよ。あんまり店も儲からないし、辞めますと。」中野さんは言った。ところが、商工会に「廃業届」の提出を求められると、また気持ちが変わった。「廃業届出してくださいっていうのは、もう仕事できねのかなと思って。やっぱり、やめましたね。辞めんのをやめた。」そう話す中野さんの横にあるのは、26歳の時に手に入れて、大切に乘っている黄色のドウカティ。この愛車も店の外に投げ出され、泥に埋もれていたものを掘り出し、何度もオイル交換をして奇跡的にまた乗れるようになったものだ(図2)。

今も店には八戸や宮古などから口コミでお客さんがやってくる。道の駅の移転についてのお考えもお聞きした。「影響はどうなのかな。微妙なところだ。やっぱり道の駅の向かいになんかバイク屋があるよ、みたいな感じで聞いてくる人もいますしね。」63歳になられた今、WEBサイトもSNSもするつもりはない。訪ねてくるお客さんを大切にして商売を続けていきたいと思っているとのことだった。





図2 中野さんと26歳の時に買って乗り続けている  
愛車のドゥカティ

#### 野田村役場産業振興課 中野雅章さん

道の駅移転について、野田村役場産業振興課の中野雅章さんにお話をうかがった。新しい道の駅は、三陸沿岸道路を通過する車を野田村に呼び込む玄関口になると共に、多様な人々が出会う交流施設となる予定であることを説明していただいた（図3）。現在の道の駅も、三陸鉄道陸中野田駅舎と一体になったユニークなもので、商店街からも近く、私たちが訪問した時（8月19日（月）12:30）も多摩、春日部など県外ナンバーを含む30台ほどの車が停まっていた。道の駅を中心市街地から少し離れた高台に移転することは、復興むらづくりの「津波防災対策」と「魅力・活力創出」という2つの柱の両立の方向性について論点を提示する。商店街活性化へのお考えをお聞きすると、中野さんは活性化とは何かについて真剣に考えておられた。「人口減少の本質的な問題って、行政機能が維持できなくなるなどいろいろあるけど、行きつくところは、寂しい気持ちになるなどの情緒的な問題なのでは。」とおっしゃっていた。また、「何かや

るべし！という人がいれば、、、。」と、道の駅を呼び水として新しいビジネスが生れること、村民の主体的な活動によって商店街への波及効果が生まれることを期待しておられた。



図 3 新しい道の駅のイメージパース  
(出典 広報のだ令和 6 年 2 月号)

## 中健 横山正和さん

株式会社中健（注：p227参照）で働いている横山さんは、以前東京で働いており、日本の経済が良かった時期を経験していた。アメリカやヨーロッパなど、さまざまな場所にも行ったことがあり、広い視野を持っている。横山さんは現在、野田村に住んでいて、自分のここでの生活と仕事について紹介してくれた。野田村の良さとして「比較的快適で落ち着いた生活ができる」と感じている一方で、東京については「余裕がない」と感じている。

野田村では、時間に追われることなく、リラックスした生活を送れていると話していた。この点が、彼が現時点で野田村を住みやすい場所だと考える理由の一つになっている。横山さんは話し方はとても親しみやすく、穏やかな雰囲気だった。今年の4月から野田村に移住してきた新しい住民として、自分の仕事のやりがいについて深く考えており、今後のキャリアや生活の方向性について模索している段階にある。現時点では野田村での生活に満足しているが、将来的な移住の可能性を含めて、今後どのように自分の人生を展開していくかについて考えているようだ。

## 野田村商工会青年部 北田雅徳さん((有)北末)

北田さんに商店街の変化と若い世代の視点について語り合う電話インタビューをした。彼は商店街が昔は親しみやすかったが、今は道路が広くなり、車が中心になってしまったため、昔のような親しみや交流が減少していると感じていた。商店街の活性化についても話した。商店街は年配の方が中心となっていて、若い人々の視点が不足していると感じていた。若者向けのイベント(例えば、去年から開催されたNODA Summer Park)を新たに開催して野田村民はもちろん村外の人達に野田村に興味を持ってもらう為努力している。

北田さんは祭りなどのイベントが村を活性化する重要な要素であると強調した。彼はイベントの準備や開催が大変である一方で、村の人々が集まり、楽しむことができる貴重な機会だと語った。イベントの成功が、参加者の努力と協力の賜物であり、その達成感が楽しいとのことだった。

商店街は若い世代からすれば関心の的ではなく、むしろ行政が発信する新しい情報や、地域が変化することに関心が集まっている。商店街の将来についても話し合い、北田さんは、一部の店が継続して経営を続けたいと考えているものの、経営の難しさに直面していると感じている。地域活性化を目指して、祭りやイベントを通じて若い人にも関心を持ってもらいたいという考えが語られた。北田さんの言葉から、彼が村の未来に向けての期待と懸念を共有していることが伝わってきた。

## たいようのいちこ 松川美穂子さん

松川さんは、化学肥料不使用の食材を取り扱う店を運営し、地域活性化に貢献している。看護師として働いた松川さんは、健康啓発にも力を入れている。「お弁当が売ればいいのじゃなくて、仕組みを作りたい」と述べ、単なる商売としての成功ではなく、地域に住む高齢者や若者が「生涯現役」で働き続けられる環境づくりを重視している。さらに、松川さんは、自分が手掛ける商売や活動が、地域の他の商店や事業者にとっても良い影響を与えることを期待している。

松川さんは「生涯現役で誰もが自分ができることで、経済が回ったり、域内で豊かになったりっていう報酬を得ながら、生きられる仕組みを作る」というビジョンを持ち、それを実現するために様々な工夫をしている。

商店街の活性化は、単なる商売ではなく、働く場所を作ることが目標でもある。高齢者の知恵を活かし、世代を超えた協力体制を構築する考えもある。

また、シェアハウスやカラオケなどの施設を設けることで、地域の若い人たちを引き付け、世代間のコミュニケーションを促進する取り組みを行うと考えている。松川さんはこれらが地域の持続可能な経済活動を築く上で重要な役割を果たすと信じている。



図4 松川さん（右から2番目）と食事しながらの対談

#### 野田村長 小田祐士氏

野田村長には3つのことをお聞きした。1つ目は、新しい道の駅と中心市街地との関係についてである。三陸沿岸道路開通によって変わる人の流れを、まずは野田村へ引き込むきっかけをつくるが必要で、商店街の人々はそれをチャンスと捉え、新しいお客を引き込む努力を一緒にしてもらいたいと期待されていた。

2つ目は、高台の新しいまちづくりについてである。震災直後、行方不明者の早期発見のために、建物の持ち主1人1人をお願いして回り、解体撤去を進めたことや、災害危険区域の線引きに非常に悩んだことをお話して下さった。村民の命を一番に考えると、村の機能の高台移転は必要である。ただ、助け合って生きてきた人たちだからこそ、高台移転がスムーズに進んだことも教えてくださり、村民の親密なコミュニティの重要さも強調されていた。

3つ目は、震災前後、そして現在のまちづくりへの村長の想いについてである。村長は、祭りや葬式などの行事を通じた人のつながりは徐々に希薄になっていると感じておられた。村内移住によって隣近所との距離感が変わったことは村民のストレスになっており、それが元のような感覚になるには何十年もかかるだろうとお話された。

最後に「村長が焼き鳥屋さんを開店するとしたらどこにされますか？」という質問を投げかけてみた。村長はすぐに「近くにしたいねえ。」と答えられた。「やはり役場の近くですか」と尋ねると、「みんなが集まりやすいところ。好きなことを話し合えるスペースがほしい。どこでもいいんだけど。みんなが寄ってきやすい場所であって、飲んだ後帰りやすい場所。」と答えられた。そこには高台移転を推進する村長とはまた違った、中心市街地で親密な時間を過ごしてきた野田村民としての顔があったように思った。



図5 小田村長とのんちゃんと私たち

### 3-2. 商店街の機能と偶然に出会える場所とのつながり

商店主へインタビューを実施するために、筆者らは3日間商店街の中を行ったり来たりした。その中で、インタビューを終えた店主とガラス越しに会釈を交わしたり、道路上で出会った村民の方々に話しかけたり、話しかけられたり



という、ささやかな、それでいて深く心に残る交流を経験した。本節で紹介するエピソードは、商店街がそのような偶然の交流や情報交換が生まれる場でもあることを示す例である。

### 街歩き—中野十郎さん

19日、偶然に公園の道を散策していた80代の男性中野さんと出会った。彼は野田村に本部をおき、久慈市に本社、東京、盛岡に営業所を持つ大きな事務用品販売会社、中健の社長だった。彼は村外に広いネットワークを持っており、以前、野田まつりに東北各地のまつりを呼んできた話などを教えてくれた。彼は「毎日この商店街をパトロールするのが楽しみなんだよ。」と言った。このような日常的な散策は、彼にとっての社会的つながりの維持において重要な役割を果たしているのではないかと思う。他の高齢者たちも、商店街を日常的な集いの場として利用しており、商品を買うこと以上に、店主や他の客との会話を楽しみにしていることが確認できた。



図6 中健



図7 白木屋クリーニング



図8 北末

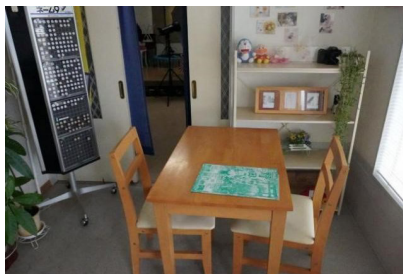


図9 小林フォト

### 街歩き—きてきて久慈市の宇部一春さん

20日、道をぶらぶらしていたとき、偶然にも軽トラックに乗ったおじさんが通りかかり、突然止まって私たちに声をかけてくれた。彼は地域観光を勧めるボランティアで、私たちを野田村にきた観光客だと思ったようであった。私たちの目的を説明すると、宇部さんはとても親切に、自分がよく知っている時計眼鏡店まで案内してくれた。「もっと多くの観光客に野田村に来てもらいたい」と宇部さんは言った。野田村の観光や商店街に対する彼の情熱も伝わってきて、非常に貴重な体験だった。このような直接的な交流が、地域社会に対する愛着を強めるきっかけにもなるのではないだろうかと思った。

この特徴は、単に物を売るだけではなく、「時間」と「空間」を提供するという、野田村ならではの商売のスタイルだと感じた。お客さんが店内でゆっくりと座り、誰かと会話を楽しむ光景が自然に見られる。忙しさと効率を追い求める現代社会の中で、野田村は時間をゆったりと過ごすことの価値を強調しているように思う。商店街を歩いていても、物を売っているのか、それとも時間を売っているのか、少し戸惑うほどだが、それこそがこの場所の魅力だ。

実際に、野田村に来る人々は、どこにいてもものんびりとした時間を楽しむことができる。このリラックスした雰囲気は、野田村の商店街全体に漂っており、訪れる人々に「ここで過ごす時間を楽しんでほしい」という思いが伝わってくるようだ。商売のためのスペースというよりも、コミュニティのためのスペースが優先されているように感じた。このような村の姿勢は、ただ物を売るだけでなく、人々に心地よい時間と空間を提供することを重視しているといえるだろう。

### 4-3. 商店街活性化のための戦略の提案

これまでの考察をふまえて、野田村らしい「商店街の活性化」に向けた戦略を提案する。1つ目の戦略は、商店街を村民のための資源として捉える視点に立つことである。通常行われる商店街の活性化策は、「商業機能としての商店街活性化」を目指すものであり、野田村商店街でもスタンプ会や電子マネー利用によるポイント還元など、すでに様々試みられている。それらは、各店舗の努力に対して公的サポートを投入し、商業機能の活性化を通じて商店街全体の活性化を計るものであり、図10の経路で示される。この経路は、これから事業



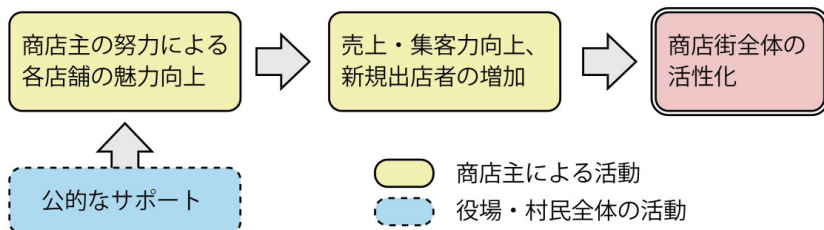


図 10 商業機能としての商店街活性化の経路

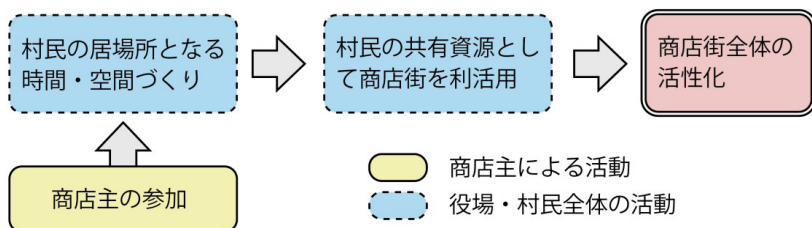


図 11 公的機能としての商店街活性化の経路

を拡大していきたいという商店主にとっては追い風となり、今後も重要である。一方で、今のお客さんを大切にしながら、現状維持を目指す商店主にとっては、費用対効果を考えた際、ともすると負担を感じるものでもある。

ここで、商店街を村民のための資源として捉える戦略的視点に立つと、もう1つ新たな経路も開かれる。それは、図11に示す、「公的機能としての商店街活性化」の経路である。ここでいう「公」とは、オフィシャルという意味の「公」ではなく、誰にでも広く開かれた、パブリックという意味の「公」である。野田村商店街が提供しているゆったりとした時間・空間は、村民の居場所づくりという公的機能を有している見なすことができる。この経路を経由して目指される商店街活性化の実施主体は、広場や交流施設の維持管理の主体がそうであるように、各店舗の責任範疇に閉じたものではない。商店主は村民の居場所づく

りという公的な意義ある事業を、多様なアクターと共に実現する参加者になる。2つ目の戦略的視点は、未来を担う世代が商店街で買い物する体験の機会をつくることである。商店街はただ人が集まる広場やイベント会場ではなく、物やサービスのやり取りを通してこそ物語が生まれる場所であるという点で、やはり商業機能は重要である。仮に商店街の商業機能が失われた場合、一体「何が」失われるのかは、体験なくしては気づきにくい。現在、商店街維持の必要性を感じている人々は、道路拡幅前の商店街で親密な子供時代を過ごした世代より上の年齢の方が多い。足を運ぶきっかけとしてのイベントは重要であるが、買い物を通じて、物やサービスと同時に「何が」交換されているのかを、若い世代に体感してもらうことは、長期的な戦略として重要である。

これら2つの戦略によって目指すべき活性化の質は、単純な消費行動ではなく、商店街での時間と空間を長い目で守り育てる、温かいファンの集まりのようなものではないだろうか。また、そこから導かれる施策や予算配分などの戦術は、福祉、予防医療、教育、防犯、防災、観光等、多様な分野へ発想の幅が広がるだろう。

## 5. 感想

商店街は震災からの復興を遂げ、時代の変化にも対応して再建を進めてきた。3日間、たくさんの方々とお話をさせていただいた。皆さんはとても親切に、心を開いて多くのことを教えてくださった。その中で、商店街の皆さんから一番感じたのは気持ちは大事だということである。「人が少ない、寂しい」という声が多かったが、皆さんは一生懸命に頑張って、もっと多くの人を野田村に來てもらえるように、もっと村が元気になれるように頑張っている。

### 謝辞

最初のインタビューの対象を紹介してくださった佐藤仁昭さん、野田村の魅力をとくさん教えてくださった役場の中野雅章さん、日形井賀友樹さん、店内の座るところを提供してくださり、お話をしてくださった小林ご夫妻さん、北田清子さん、中野辰弥さん、谷地広樹さん、横山正和さん、出張中にもかかわらず電話インタビューを受けてくださった北田雅徳さん、特別ランチを作って下さり、たくさん自家製ミニトマトをくださった松川美穂子さん、街歩き時偶

然に出会った宇部一春さん、野田村の昔話をたくさん教えてくださった中野十郎さん、我々の問題に気さくに答えてくださった村長の小田祐土さんに、心から感謝申し上げます。

## 参考文献

### 野田村

2024 「野田村勢要覧—資料編 令和6年度」

<https://www.vill.noda.iwate.jp/soshiki/miraizukurisuishinka/miraizukurisuishinhan/nodamuranogaiyo/628.html> (2024/9/24 アクセス)

### 野田村総務課

2022 「野田村防災マップ」 [https://www.vill.noda.iwate.jp/soshiki/somuka/shomubosaihan/anzen\\_anshin/2/1/493.html](https://www.vill.noda.iwate.jp/soshiki/somuka/shomubosaihan/anzen_anshin/2/1/493.html) (2024/9/24 アクセス)

2013 「野田村復興むらづくり計画」 [https://www.vill.noda.iwate.jp/soshiki/somuka/zaiseihan/seisaku\\_keikaku/530.html](https://www.vill.noda.iwate.jp/soshiki/somuka/zaiseihan/seisaku_keikaku/530.html) (2024/9/24 アクセス)

### 野田村未来づくり推進課

野田村震災伝承アーカイブ <https://nodamura311.jp/> (2024/9/24 アクセス)

### 満園勇

2015 『商店街はいま必要なのか「日本型流通」の近現代史』 講談社。